

# 戦後日本：柳田国男らの民俗学による歴史学の破壊

A・N・メシエリヤコフ  
ロシア国立人文学大学  
(日本語訳・土田久美子)

二十世紀はユートピアの世紀であった。ソビエト連邦でも、ナチス・ドイツでも、そして日本でもユートピアを建設する試みが見られた。すなわち、ソ連は共産主義、ドイツは「新秩序」、日本は「大東亜共栄圏」の建設を試みたのである。

ユートピアの思想を実現させる為、いずれの三カ国でも一社会的・文化的相違はあるにせよ「全体主義」として特徴づけられるべきシステムが構築された。いずれの三カ国でもユートピアの建設は、国内外に対する広範囲の武力行使によって実現された。

二十世紀はユートピア建設の世紀であるだけでなく、その破綻の世紀でもあった。前述のいずれの国家もこの運命を免れることは不可能であった。ドイツと日本は戦争に敗北し占領下に置かれ、ソ連は第一に非効率的な経済システムの為に崩壊した。

全体主義が破綻した後、いずれの三カ国でもより民主的・個人主義的な社会を創り出す政策がとられ、それは「全人类的」価値への参加として理解された。それと同時に、かつての希望の破綻に伴い、厳しいアイデンティティの危機が生じた。危機には解決を要する。新しいアイデンティティを創造した日本の経験はかなりの独自性で際立っており、あらゆる観点からの研究がなされる必要がある。

戦前の日本の公式イデオロギーは、一体化のメタファーを好んだ。「一億一心」というプロパガンダが主張された。日本人が他の国民より優れている根拠は第一に、神道の神々によって創造された国に住む日本人は、他の国民よりも天皇に対する忠誠心が強いからであった。この主張と論争するのは容易なことではなかった、というのも日本が肩を並べる世界の大国（米国、仏、独、ソ連）では既に君主制の段階を過ぎていたからである。例外は英国であるが、確かにこのような君主に対する忠誠心の高揚は英国には見られなかった。「日本人」という言葉自体公式文書で使われることは稀であり、代わりに「日本臣民」あるいは単に「臣民」という表記が用いられた。

大正天皇（1912-1925）の即位式を控えた折に、『即位記念皇室大典』が刊行された。本書の内容は、政府の最上層部によって承認されたものであった。編纂者は馬場直美である。本書は以下のような言葉で始まっている。

朝日に匂ふ山櫻は實に清く美はしき花也。然れども此花や外國に移し植ゑば、移し植ゑられざるに非ず。雲の搖曳く富士の神山は實に高く尊き山也。然れども外國には之より高き山無きには非ず。或は風俗、或は制度固より彼れ勝れるあり、我れ勝れるありて、一樣ならずと雖も、是等は概ね模倣せんと欲せば、何程にても模倣するを得可し。現に我は彼れの長を採りて洋服を着し、自動車を駛らす。彼れ亦た我が長を採りて茶の湯を弄そび、柔術を修む。況んや日に月に進む交通の利便は、次第に各國の異同を

混一せんとするの趨勢にあるをや。然れども茲に、外國人の移し植ゑんと欲して能はず、模倣せんと欲して能はざる一事あり、外にもあらず、我が皇室が萬世一系に在すこと是也。

何れの國にても『君は民の父母』たらんことを、理想とせざるは莫かる可し。然れどもこれを實際に行ひ得るは、獨り我が大日本帝國あるのみ也。何れの國にても民に『忠孝の兩全』を勧めんと欲せざるは莫かる可し。然れどもこれを實際に行ひ得るは獨り我が大日本帝國あるのみ也。

我が日本帝國の皇室と國民との關係は、夫の忌はしき征服者と被征服者との關係にあらずして、父と子の關係也。家長と家族との關係也。而も夫が百年二百年の間にては無く、國初まりて以來何千年といふ久しき間のことなれば、遺傳を重ね、先天的に皇室を敬愛するといふ觀念は、國民の頭腦に深く／＼刻まれ、やがて日本國民の一個抜く可からざる性格とはなる也<sup>1</sup>。

この文章より、日本の風がどの方向に吹いていたかは非常に明らかである。日本の自然や日本人の習俗に独自性があるとする考えは脇へ置かれた。イデオロギーの主唱者の注意は完全に、天皇の人物像や王朝の継続性に集中していたのである。

戦前の日本の民俗学者は、地域共同体を研究して、日本が言語・習俗・生活様式のかなり大きく異なる、隔離された多くの共同体から構成されている事実を完全に消すことはできなかった。しかし、国家全体の課題は、全くこれと正反対のこと、すなわち日本人は同質で、分ちがたく一体化した民族であると証明することであった。戦前、民俗学はごく限られた知識層のみに存在が知られる学問分野に過ぎなかった。

ところが、敗戦後は民俗学の需要が高まった。それは第一に、以前の自己アイデンティティを確認する方法、とりわけ歴史学の信用性が失墜した為であった。忠誠心を示す事例で満たされていた歴史教科書は、もはや使命を果たすことができなくなった。忠誠心のお手本であったかつてのヒーロー（和氣清麻呂、武内宿禰、楠木正成等）は、教科書の本文や紙幣から消え去ってしまった。

そこへ救いの手を差し伸べたのが民俗学であった。絶望感、卑屈な感情、一体化の理想の喪失、マルクス主義の普及、そして「新興宗教」の急成長に見られる社会の混乱を克服できると見込まれるアプローチを、柳田国男（1875-1962）を中心とする民俗学者たちが提供したのである。個人主義の基礎が未発達である日本社会において、社会を統合する、いわば「くつつける」思想の必要性は極めて大きかった。他の国民との違いを際立たせる必要性もまた非常に大きかった。おなじみのウチ／ソトの対比に、新しい意味づけが必要であった。戦前には、ウチ／ソトの対置は攻撃的な性質を有し、戦線拡大の正当化に用いられた。今度はこの対比を、非攻撃的な面に変えることが課題となった。

民俗学を社会的に認知させるのにとりわけ大きな役割を果たしたのは、柳田国男である。終戦までに彼は既に多くの物語、詩歌、隨筆、論文及び準学術的な文章を著していた。さらに、彼は官界でも知られていた。東京帝国大学法学部を卒業した後、彼は農商務省の官吏として就職し（1900年）、奥地の農村へ数多くの出張を行った。農村の生活を観察したことは、彼の多くの旅行記の基になった。その後柳田

は、宮内省書記官として勤務した（1908年）。1913年には、『郷土研究』という雑誌の発行人の一人になった（1917年まで刊行）。1914年、貴族院書記官長に就任した（1919年に依願退職）。以後柳田国男はたびたび旅行をし、民俗学の講義を行い、朝日新聞社に勤めた。1925年、彼は『民俗』という雑誌を発刊した（1929年まで刊行）。1933年には雑誌『島』の共同発行人の一人となった（2年間継続）。この間柳田国男は数多くの書物を著し、民俗学の調査に参加し、民間伝承を収集した。彼の文学作品は一定の名声を得ていた。しかし学界では一定の知名度があったものの、終戦に至るまで柳田が学者として広く評判を博することはなかった。彼が真に認められたのは、八十代になってからであった。1946年7月、彼は天皇の枢密顧問官になった（枢密院は翌年5月に廃止）。1947年7月に日本芸術院、1948年12月には日本学士院の会員となった。1951年11月、柳田国男は文化勲章を受賞した。社会的にも政府にも柳田が認められたことは、彼個人の功績の証というだけでなく、民俗学が戦後日本に必要とされていたことを何よりも物語るものである。

1954年に柳田国男が編集した『日本人』という論集が刊行されたが<sup>2</sup>、これは民俗学が学問の一分野からイデオロギーに変化する過程の重要な文献と見なすことができる。本書を執筆する作業は1940年代末に行われていたが、発行されたのは米国による日本の占領政策が終了してからであった。柳田国男は、次のように述べている。

一般的にいて、ここ数年来の日本人というものは恐ろしくなるほど質は低下し、粗雑になってきているのである。したがってそういうおおぜいの中にも、あせた秋の落ち葉のような、見たところ姿のかんばしくなく、また将来の楽しみが非常に少ないものがあるので、それを気づかせる人をひとりでも多く作り育てていくために、ちっとも気を弱めずに進んでいけるという学問が一つ起っているのである。われわれが民俗学という小さな学問の区域に割拠しておりながら、なお日本全体を背負って立つようなことをいう理由はそこにある。ことに日本人はある少数の学者だけにその教えを仰ぎ、彼らのいいなりに、至極ごもつともだといいいながらついてきたのであるが、その人たちのちっとも顧みなかった隠れた日本の興味ある新事実が今はまた発見せられる。いってみればわれわれが無学であったということのために、新たに知ることの多かったことを喜び、かつは泣いたり悲しんだりしている人たちを少しでも救うことのできるほうに、この学問をまず応用してみたいというのが、われわれの趣旨であった<sup>3</sup>。

このように、柳田国男の門下にあった民俗学者たちは、自らを、合理的手法により真理を明らかにすることを研究の目的とする〈象牙の塔〉にこもった学者ではなく、いわば「活動家」や「伝播者」、つまり新しい日本の創造者であり教師であると認識していたのである。日本の伝統の通り、彼らは「学」と「教」の間に明確な境界線を引いたのである。その際、「教」の方が、人を認識過程に導き真理の道を教え示すものとされていた為、社会的地位は遥かに高かった。仏教も儒教も「教」の範疇に入っていたのも道理である。

柳田国男の弟子である和歌森太郎も、「この『日本人』という本によって、一般大衆がほんとうの自信をもてるよう、反省のためのきっかけをもたせるようにするのがいいのじゃないかと思えます」<sup>4</sup>と師と同様の意見を述べていた。民俗学者

は、名もなき日本人の記念碑とも呼ぶべき構造を作り出したのである。

この構造を築くために、場所を空ける必要があった。つまり歴史家及び彼らの「誤った」アプローチや手法を清算しなければならなかった。というのも、国史こそが戦前及び戦時中の国家イデオロギーの基礎になっていたからである。萩原龍夫は、以下のように述べている。

日本人の欠陥の一つとして、自己に対する歴史的自覚のとぼしいことをあげることができよう。戦争中、国史教育はあれほど強調されていたにもかかわらず、そのほとんどが主観的、感傷的の度がすぎて、科学的根拠がとぼしいものであった。敗戦後そうした点は指摘されていくらか改められかけてはいるが、まだまだ地についてはいない。自国に対して思い切った誇りと、思い切った卑下と、この両極端が併在しているようである。かつての日本軍隊が、いかにも誇りゆたかに見えながらも敗戦当時ははなはだしくみじめな退廃を露呈してしまったように、日本歴史についてのいかにも尊厳に満ちた説き方と、それと全く相反する自卑的な説き方が、近年の日本人の知識をはなはだ矛盾に満ちたものになっているのである。今日ほど歴史を通じての日本人の自己反省が必要な時はないのである<sup>5</sup>。

萩原龍夫はさらに論を進めて、「国史」に対してのみならず、歴史学の方法論の基礎に対しても疑問を呈した。彼は、歴史学はもっぱら書き記された記録文書に基づいており、その記録の出所は政治権力と深い関係があったと主張した。近年西洋で史料に対する批判的なアプローチ、すなわち様々な観点が反映された史料を比較対照する作業を行うアプローチが生まれた。そのように比較対照することによって、客観的な状況が明確に描けるようになるのである。しかしながら今日の日本では、萩原によれば、そのようなアプローチは不可能である。なぜなら、ごく最近まで非常に限られた一部の人にしか教養がなく、様々な観点を示すことは容易でないためである。しかも現存する史料には、日常生活が反映されていない。だが現在の危機的状況からの出口はある。それは民俗学に目を向けることである。民俗学を歴史学の一部と見なすこともできるかもしれないが、日本には存在しない理想的な歴史学の一部と考えるべきである<sup>6</sup>。

萩原龍夫は日本人の「歴史的自覚のとぼしさ」を指摘しつつも、これを切り抜ける道は存在すると指摘する。「それは日本人の生活の根底にあるもの、『日本人のこころ』というべきもの、心性とか根性といってもよいであろうが、そうしたものに科学的に到達することである。民俗学はこの点でもっとも適当な道である。

(中略) われわれは、日本に民俗資料の多いことをもって、単におくれた国の悲哀として扱わず、これを世界における日本人の使命の一つのあらわれとして見るのである。」<sup>7</sup>

柳田国男に続いて萩原龍夫は、民俗資料の採集は日本人のみに可能だと主張した。とりわけ生活意識に関する部門の民俗資料は、採集過程で目や耳にとどまらず「心」も働かせなければならないため、日本人でなければ不可能である<sup>8</sup>。明治・大正時代の愛国心は政治力、経済成長、戦争の勝利に対する誇りや、排外意識に基づいていた。この愛国心は「外面的」な借り物に過ぎなかった—そうでなければ、敗戦によって今日見られるような思想的混乱は生じなかったであろう。愛国心が個人の責任感や使命感の根底となるために、それを内面的情操にすることが課題であ

る<sup>9</sup>。言い換えれば、日本人であることそのものに誇りを持たせるようにすることである。民俗学者は、日本人に個人主義の基盤が未発達であることを批判して、現状では独裁主義が容易に生じかねず、真の民主主義が発展するためにはさらに多くの努力がなされなければならないと主張した<sup>10</sup>。これは、民俗学的・農村的性格の強い民主主義であった。民俗学者は一ちょうど戦前の日本の政治家と同様に一ウチ／ソトの間にはっきり境界を引くという、農民のメンタリティの主要な要素の一つを積極的に活用した。村落と村落の間を隔てる地形が無数にある日本では、この境界は他の多くの国民の文化的伝統よりも明確に際立っていた。それにもかかわらず民俗学者は、日本人が単一の民族であることを証明しようと努めていたのである。

さらに柳田国男は以下のように述べていた。

幸いにして日本では、気候のまるで違う地域にも、そこに同じような気持ちをもった、そして同じような家の経験をもっている者が村を形成しているために、ある重要な問題の変遷を調べてみようとするれば、やや新しい文化からかけ離れた数ヶ所の場所を比較検討すれば、案外簡単に理解し得られるという便宜が得られ、日本だけがもちうる大きな特徴であった。これなどは文献が残っているということとほとんど同じ価値のあるもので、京都の公家や寺院の僧侶たちの手によってなった、いわゆる普通人にはどうも覚えもきれぬ、またまねもできぬような文書を、唯一の材料にして二千年の歴史を調べようとした欠点も補えるのである。

隣国の中国などは、歴史の古い国であることは確かであるが、今そこに住んで暮らしている者の歴史についていえば、日本などの比ではなかった。九州の果から東北までの約五百里までのあいだには、山や川にへだてられて、そんなにまで遠く越えていくことが許されず、別れ別れになって成長してきた長いあいだの変遷の中にも、なおわれわれが知ろうとして忘れきっているところの過去の経験を、新たに思い出すことのできるというのは島国という日本だけがもちうる大きな便宜でもあった<sup>11</sup>。

日本人が同じような家の経験をもっていると述べる柳田は、戦前のイデオロギー主唱者が家族国家と言っていたのと全く同じ制度に目を向けていた。今度は、国民が家族だという話になっているのである。日本人の「独自性」に言及しながら、柳田は再び戦前のイデオロギーの主要なテーゼを繰り返していたのである。だが彼は、「独自性」の概念に別の意味合いを持たせた。

われわれの学問というのは、真実を語るのが義務である。その価値の正、不正は後世の者が決めるだろう。ここで筆者が説きたかったのは、要するに少数のもっともすぐれた人とか、あるいはもっとも尊いといわれる方とかではなく、日本人というのは、それは一つのかたまりであり、そしてそのかたまりの中には幸福の差異や階級の序列は若干あっただろうけれども、そういうものを超越した一団の日本人というものの歴史を特に筆者は考えてみたかったのである<sup>12</sup>。

こうしたアプローチの下では、イデオロギーの危機に襲われた社会でいつも非常に緊要な問題が脇に置かれた。それは、何らかの歴史的人物の評価の問題である。民俗学者は具体的な人物を扱わない。名もなく埋もれた人々が社会的な機能を有し

ているだけの、いわば人間のグループを扱うものである。この場合、それは彼らが日本人と見なしていた抽象的な人間、構造である。

具体的な人物（天皇）に対する忠誠の代わりに、民俗学者は日本の民衆に忠実であること、彼らの中に日本文化の「真髄」を追求することを提起したのである。萩原龍夫は、日本文化の中核は上流階級や知識階級よりも、「一般民衆」の生活の内部に多く見出されると指摘した<sup>13</sup>。「一般民衆」とは、勿論農民のことであった。軍事的プロパガンダと同様に、民俗学者も都市文化の担い手ではなく「郷土の人々」に主たる期待をかけた。日本は急速に都市化していたが、大多数の都市住民はまだ農村の生まれであった。農民文化を国民のイデオロギーに変えるために、農民文化を記述して目録を作成し、その地位を高め、全国民の郷愁を呼び起こすことが課題となった。

民俗学者は、歴史学及びその方法論を否定したが故に、世界を不変なものに見なすという結果を招いた。日本の民俗学者は、出来事やその非反復性ではなく、出来事の反復性に関心を寄せた。そのため、彼らの主な注意は一年間の、及び生活サイクル上の一行事や儀式に注がれた。このようなアプローチでは、農村や共同体、そして生活自体の発展の可能性が奪われてしまった。ここから、柳田国男の学派に特徴的な拡大解釈や誤りが数多く生じた。民俗学者は、「日本人」は世界の始まりから存在していたという前提に立っていた。しかし外国の影響により、原初状態で備わっていた固有性のかなりの部分が損なわれてしまったのである。古代及び中世における中国の影響を論じて、柳田国男は次のように述べた。

当時の学問は全部漢文で書いてある……研究して学んでいこうとするから、せいぜい追従するだけになってしまう。自分のオリジナリティーなんかというものを出す時はない。……過去の歴史を振り返ってみると、一番文物燦然としている時が一番多くまねをしている時で、固有のものを輝かせていない<sup>14</sup>。

古代日本の公式的な年代記も漢文で作成されており、こうして、日本ではなく中国的な意味を有するものであった。それ故、年代記は日本の民衆の「精神」を反映しておらず、その価値は低いとされた。

ここから、原初状態の一真の一意味を有する、筆録によらない形の文化を研究することが緊急に必要なのである。七・八世紀、つまり中国文化の影響を集中的に受けた初めの時期に「日本人」はまだ存在せず、この言葉が最初に使われた記録は説話集『宇治拾遺物語』（12世紀）であることを指摘しておこう。だが「歴史的」見地は、柳田国男及びその弟子たちにとって二義的なものであった。彼らは「以前」と「現在」という概念に依拠しており、次の柳田の言葉に見られるように、二千年の違いもさほど重要とは思われなかったようである。

（日本列島に）日本人が三千年、五千年前はいつてきたとしても、その時すでにある癖、たとえば事大主義というようなものをすでにもっていたかもしれない。まあよくわかるのはそんなものだ。事大主義などというものは本国からたずさえてきたかもしれないね<sup>15</sup>。

歴史主義の欠落は、詩的なアプローチや、メタファーを頻繁に用いることによって補われた。堀一郎は、抽象的な日本人の生活をこのように描写している。

われわれは生れ落ちる瞬間において、すでに社会のうちに存在している。母を中心にする家族集団の保護なしに、赤ん坊は生きながらえていくことはできないのである。そして社会は、その新生の赤ん坊を、その社会の一員たるべく鑄型にはめ、教育する。村に生れた人間は、その村落社会という樹木の一つの葉である。それは家族という小枝につらなり、家集団の太枝を通して全体社会の幹につらなっている。そしてその根は遠い過去の祖先たちの生物的、文化的な遺伝や遺産の中に深くおきている。だから葉である人間は、過去無数の死者の蓄積してきた経験とエネルギーによって、ここに生かされているのであり、群れを通して自らを形成しているのだといえよう<sup>16</sup>。

堀一郎は、このような人間の生活は「動物のように自由でない」と強調している。それ故彼は、一連の植物のメタファーを導入している。「植物のコード」は日本文化に特徴的なものである。それは、時間の「摩擦」によってのみ変化する、静止した自然の対象物に進んで注意を向ける文化である<sup>17</sup>。この特徴は、日本語の詩歌にとりわけ明確に表現されているのだが、それを戦後日本の民俗学者は特に好んだ一なぜなら日本語で書かれていたからである。だが民俗学者は詩人以上のことを行った。彼らは、空間を「凍結」させるだけでなく、時間をも止めることを提案したのである。「文化的英雄」として彼らは遣唐使の廃止を発案した菅原道真（845-903）を挙げた。その理由は、当時政情が不安定であった唐に使節を派遣するのが危険だったからであることは顧みられなかった。菅原道真が第一に中国文学に造詣の深い人物として知られていたことも重要ではなかった。何の根拠もなく柳田国男と堀一郎は、菅原道真がもはや唐から学ぶべきものがなくなったと考えていたことが遣唐使を廃止した本当の理由だと主張した<sup>18</sup>。菅原道真は戦前も優れた日本人のリストに入っていたことを想起する必要がある。

歴史学の方法論によって認識することを否定したために、民俗学者の意見によれば歴史学を超える性格を有する概念が使用された。その一つとして、第一に自然条件が挙げられる。民俗学者の意見によれば、それは不変なものであった。彼らには、まさに自然条件こそが国民のメンタリティ形成の鍵を握る要因だと思われたのである。

「島国」という用語は、彼らによって最も頻繁に使われた言葉の一つである。それは戦前のプロパガンダ主唱者の間でも広く用いられていた。拡張政策を正当化するために、島国の日本には増大する人口のための土地があまりにも少ない、と主張されたのである。だが領土（特に大陸—朝鮮及び満州）を獲得して以来、この言葉は部分的に「大陸日本」及び「海国」という言い回しに取って代わられた。領土の広さが不十分であることが拡張政策を正当化する根拠として言われていたわけだが、戦争の勝利によって日本はその「小ささ」を失ったのである。そして戦前の国民学校の教科書では、日本は「海国」に変えられたのである。

今の日本は、海国日本の名のとおり、世界のいたるところの海洋に、日の丸の旗をかかげて、国の光をかがやかしながら活動しています。……海国日本のほまれをあげるぶたいは、かぎりなく大きいのです。その広いぶたいに、日の丸の旗をささげて進むのが、私たちの尊いつとめです<sup>19</sup>。

当時海は、交流の媒介になるもの、日本が大国になる一既になりつつあった一た

め的手段として見なされるようになっていた。しかしながら敗戦により海外の領土を失い、日本は再び伝統的な島国としての国境に戻った。

「島国」の用語は受け継ぎながら、戦後の民俗学者は全く別の結論を導いた。堀一郎は次のように述べていたのである。

日本が全体として島国であり、村落社会が本質的に一個の島嶼的な封鎖的性格をもって成長してきたことは、一面に日本人を内観的、保守的な、寛容性と順応性にめぐまれた、そして団結力の強い、民族性のいちじるしい国民に仕上げてきた。ここから生活文化、宗教、芸術、文学のすぐれた成果も生れてきた。しかし他面、自我を主張して郷土にいられぬとなれば、その島嶼的性格は人々に生存の自由の天地を遮断していた。協同社会の外は海であるという宿命は、日本人を強く郷土および郷土的擬態に結びつける結果となり、同時に郷土的人格を形成させる素地ともなった<sup>20</sup>。

このように「島国」という用語は、良い特徴であれ悪い特徴であれ、日本人の特殊性を裏付ける論拠となった。伝統的な礼儀作法では、謙虚さが求められた。日本人は、個人としては自己の独自性を強調すべきではなかった。ところが、国民の行動原理としては全く別のこと—集団意識を他の国民と差別化し、対比させ、「個別化」させることが要請された。

柳田国男の見解によれば、「島の生活」は小さな共同体の存在を前提としていた。

実際仲間の生活からは離れたらいく所は海の中しかない。だからちょうど鳥や魚の類が仲間から離れたならば危険が多くなるからという、あのインスティンクト（本能）に近いんですね。この中に固まっていれば、まず危険があるにしても、ずっとそれが希薄になるというような気持で、あの渡り鳥なんかも渡っている時に列から離れた奴から敵に食われるから、結局あの中に固まっていようというあの気持も、そんなものから出ているのじゃないかしらと思う<sup>21</sup>。

戦後の民俗学者は、島国の日本は水の猛威に囲まれていると繰り返し述べており、海を交流の機会としてよりはむしろ障害として受けとめていた。彼らは、日本文化の混合性（土着の要素と、朝鮮や中国、西洋から取り入れられた要素の結合）よりも、その独自性の追求の方に関心を持っていた。

民俗学者は、日本人の「特殊性」が見られるきざしを探し、それらを発見した。時と共により大きな反響を呼んでいた彼らの業績には、原則として攻撃的・拡張的な要素はなかった。学者たちは日本人の「長所」だけでなく、「短所」にも言及した。だが、短所でさえ「特殊性」に見えたのである。大藤時彦は、日本語に固有な同音異義語のせいで会話の際に不自由することを認め、他にこのような言語はないと指摘した<sup>22</sup>。別の言葉で言えば、民俗学者及び彼らに続く思想家、ジャーナリスト、そして知識人と称する人々は、全世界に共通する思想や行動、生活様式の構造ではなく、他より抜きん出た「国民の」独自性を追求したのである。このようなアプローチの下では、比較文化的分析はかなりの程度フィクションに過ぎなかった。原則として思想家は、世界を個々の国や伝統に分けて考えず、世界「全体」として扱った。「他の国民と比較して日本人は……」という言い回しが、お決まりの表現になった。民俗学者は、他の国民と比較して日本文化においては聖と俗、ウチ/ソ



トがより明確に区別され、日本人はより敏感に四季の変化を感じ取り、集団の連帯感もより発達しており、並外れて好奇心が強く、死を恐れない、と主張した。文化的意義の主要な担い手である日本語は非常に豊かで、連想性に富むと特徴付けられる。日本人の言語コミュニケーションの方法は、礼儀正しく、最後まで言い切らず、曖昧で、詩的であるという点で際立っている。戦時中の公式イデオロギーも日本人の独自性を力説したが、これは別の種類の独自性であった。1940年に行われた、紀元二千六百年を祝う大規模な式典を記録した書物には「われら日本臣民が紀元二千六百年を壽ぎ奉る心は他國の人には到底うかゞひ知られぬものがあり、この心の奥を理解することは極めて困難なことに屬すると思はれる」<sup>23</sup>と書かれていたのである。

実際に、日本の民俗学者のアプローチは独特であった。西洋の文化人類学は主として、西洋植民地支配を受けた民族を知る手段として形成された。これらの知識は、効果的な植民地政策を実施するため積極的に活用された。ところが戦後の日本では、民俗学の知識は全く別の目的、すなわち自分の国の民族を理解し、国民のアイデンティティを模索する目的で用いられたのである。この面で日本の民俗学者とヨーロッパのロマン主義者とは似ているところがあると認められるだろう。

日本の全般的な政治状況、近年の歴史観に対する懐疑的態度、そして民俗学者による歴史学を否定する努力といった要因によって、プロの歴史家の層は決定的に変化した。戦後二十数年間にわたってマルクス主義歴史学が指導的な役割を果たした。このような日本の歴史学者たちは、マルクス主義的傾向のある歴史学に特徴的な一連の「病氣」と全く同じ症状で「病んでいる」ことが明らかになった。この「病氣」としてまず事実に対する理論の優位、歴史をもつばら階級闘争の産物とする見方、歴史の心理的な構成要素である個人の役割の無視、歴史的過程のその土地に特有な特質の無視を挙げるべきであろう。結果的に、このような学者たちが描いた日本の歴史は一名前と日付を除いて一他どの国家の歴史とも変わらないものに見えるようになった。こうして日本の戦後の歴史学は、研究方法の方針（「あらゆる事実は理論と一致しなければならない」）において、戦前の公式的な歴史学の方法とさほど変わりがなかった。

そのような歴史学者に対して民俗学者は、日本人が魅了されずにはいられなかった価値を提供した一彼らの努力は無駄ではなかった。1960年代後半、世界で日本の奇跡的な経済成長が話題になり始めた時、『日本人論』として知られるイデオロギーの最盛期が始まった。このイデオロギーは、他のあらゆる国民との違いを主張するものであった。このテーマに関する出版物は無数にあり、その分析は別個の研究テーマとなろう。本報告では、日本人のみならず、西洋世界もあらゆる日本的なものの特異性を信じてしまったこと（文化的ステレオタイプの輸出は、国家が直接支援して行われた）を指摘するとどめておく。こうした言説の中で、日本人は美に対する特別な感受性を持ち、自然との特別な調和を求め（この背後で産業の急成長により、慣れ親しんできた居住環境が破壊されていた）日本の着物は日本の生活様式に特別よく適応し（実際には、着物はますます洋服に取って代わられていた）、日本語は全く独特な言語であり（その際比較されたのは日本語と同系のアルタイ系諸言語ではなく、通常英語であった）、日本人の食生活は見習うべきお手本になったと主張された。日本人の伝統的な食生活は植物性の食品を基礎としているが故に、日本人の腸は他の国民よりも長いという事実ですら、独自性を誇る対象となっ

た。ついには、日本人の脳半球の働きさえも他の国民とは違う、と宣言されるまでに至った。

「日本主義」のプロパガンダを唱えた人々の中には真の学者とは言えない人物も少なからずいたものの、彼らは大変な人気を博するようになった。その理論的知識の基礎を作ったのは主として、「日本民俗学の父」と呼ばれた柳田国男の学派の世界観であった。こうして、「日本国民」の新しいイメージが作り上げられる結果となった。そこからは、攻撃的、政治的な要素の大部分が失われた。新しい「日本国民」のイメージの課題は別のこと、すなわち、自国の領土は高い壁に囲まれていると見なすような日本人だけが持ちうる、心理的快適さを得ることにあったのである。

## 注

- 1 馬場直美編纂『即位記念皇室大典』帝国實業學會、1913（大正2）年、2-3頁。引用の際、漢字の旧字体を一部現行の漢字に改めた。
- 2 柳田国男編『日本人』毎日新聞社、1954年。但し本稿の執筆には、1976年発行の新装版を用いた。
- 3 同書、39頁。
- 4 同書、263頁。
- 5 同書、14頁。
- 6 同書、22-23頁。
- 7 同書、20-21頁。
- 8 同書、26頁。
- 9 同書、28-29頁。
- 10 同書、77-78頁。
- 11 同書、54-55頁。
- 12 同書、57頁。
- 13 同書、201頁。
- 14 同書、257頁。
- 15 同書、262-263頁。
- 16 同書、65頁。
- 17 А.Н.Мещеряков. Древняя Япония: культура и текст. СПб., «Гиперион», 2006. (A・N・メシエリャコフ『古代日本：文化とテキスト』サンクトペテルブルグ、ギベリオン社、2006年。)
- 18 柳田編、前掲書、266頁。
- 19 入江曜子『日本が『神の国』だった時代—国民学校の教科書をよむ—』岩波書店、2001年、45頁より再引用。
- 20 柳田編、前掲書、78頁。
- 21 同書、273頁。
- 22 同書、163頁。
- 23 紀元二千六百年奉祝會編纂・発行『天業奉頌』1943年、3頁。